

SR-01東京-07

平成19年 5月30日制定

平成20年 3月21日変更 (い)

平成21年 5月28日変更 (ろ)

平成22年 5月27日変更 (は)

平成22年 7月29日変更 (に)

平成23年 3月17日変更 (ほ)

平成23年10月19日変更 (へ)

# 一般財団法人日本建築センター 構造計算適合性判定業務規程 (ほ)

## 第1章 総 則

### (趣 旨)

第1条 この構造計算適合性判定業務規程（以下「規程」という。）は、一般財団法人日本建築センター（以下「財団」という。）が、建築基準法（昭和25年法律第201号。以下「法」という。）第77条の35の5第1項に規定する指定構造計算適合性判定機関として行う、法第18条の2第3項の規定により読み替えて適用される法第6条第5項、法第6条の2第3項及び法第18条第4項に規定する構造計算適合性判定（以下単に「判定」という。）の業務の実施について、法第77条の35の9の規定により必要な事項を定めるものである。(ほ)

### (用語の定義)

第2条 この規程において次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- (1) 建築確認 法第6条第1項及び法第6条の2第1項（法第87条第1項、法第87条の2又は法第88条第1項若しくは、第2項において準用する場合を含む。）に規定する確認をいう。
- (2) 制限業種 次に掲げる業種（国、都道府県又は市町村の建築物に係る工事監理業を除く。）をいう。
  - (a) 設計・工事監理業（工事請負契約事務、工事の指導監督、手続の代理等の業務及びコンサルタント業務を含む。ただし、建築物に関する調査、鑑定業務は除く。）
  - (b) 建設業（しゅんせつ工事業、造園工事業、さく井工事業等建築物又はその敷地に係るものではない業務を除く。）
  - (c) 不動産業（土地・建物売買業、不動産代理・仲介業、不動産賃貸業及び不動産管理業を含む。）
  - (d) 建築設備の製造、供給及び流通業
- (3) 親族 配偶者並びに二親等以内の血族及び姻族をいう。

- (4) 関係企業等 次のいずれかに該当する企業、団体等をいう。
- (a) その者又はその親族が総株主（株主総会において決議をすることができる事項の全部につき議決権を行使することができない株主を除く。）又は総出資者の議決権の100分の5以上を有している企業、団体等
  - (b) その者が所属する企業、団体等（過去2年間に所属していた企業、団体等を含む。）
  - (c) その者の親族が役員である企業、団体等（過去2年間に役員であった企業、団体等を含む。）

**（基本方針）**

第3条 判定の業務は、法、これに基づく命令、告示、条例及びこれらに係る通知（技術的助言）並びに都道府県知事が定める基準によるほか、この規程により、公正かつ適確に実施するものとする。

**（判定の業務を行う時間及び休日）**

第4条 判定の業務を行う時間は、次項に定める休日を除き、午前9時15分から午後5時45分 までとする。（ろ）

2 判定の業務の休日は、次に掲げる日とする。（ほ）

- (1) 日曜日及び土曜日
- (2) 国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日
- (3) 12月29日から翌年の1月3日まで

3 判定の業務を行う時間及び休日については、次に掲げる場合においては、前2項の規定によらないことができる。

- (1) 第10条第4項の説明を受ける場合その他判定に係る審査を行う場合
- (2) 緊急を要する場合その他正当な事由がある場合

**（事務所の所在地等）**

第5条 事務所の名称及び所在地は、次の表に定めるとおりとする。（へ）

	名称	所在地
(1)	本部	東京都千代田区神田錦町一丁目9番地
(2)	大阪事務所	大阪府大阪市中央区南本町一丁目7番15号

2 判定の業務を行う区域（以下「業務区域」という。）、当該業務区域の判定の業務を行う事務所及び当該業務区域の判定の求めを受け付ける事務所（以下「主たる事務所」という。）は、別表1に定めるとおりとする。

**（判定の業務の範囲）**

第6条 財団は、別記に定める建築物（以下「判定対象建築物」という。）に係る判定の業務を行うものとする。（は）

2 財団は、財団が法第18条の2第3項の規定により読み替えて適用される法第6条の2第3項の規定により指定確認検査機関として求めなければならない判定の業務は行わ

ないものとする。

3 財団は、次に掲げる者が建築主である建築物又は設計、工事監理、施工その他の制限業種に係る業務を行う建築物について、その判定の業務を行わないものとする。

(1) 財団の理事長又は判定の業務の担当役員

(2) 前号に掲げる者の親族

(3) (1)に掲げる者の関係企業等

4 財団は、次のいずれかに該当する指定確認検査機関から求められる判定の業務は行わないものとする。

(1) 財団が指定確認検査機関の代表者（代表権を有する役員をいう。）又は担当役員の関係企業等に該当する場合にあっては当該指定確認検査機関

(2) 財団の親会社等（法第 77 条の 19 第十号に規定する親会社等をいう。）である指定確認検査機関

## 第2章 判定の業務の実施方法

### （判定の求めの事前通知）

第7条 判定を求めようとする建築主事又は指定確認検査機関（以下「建築主事等」という。）は、判定を求めようとする日の概ね7日前に、判定の求めに係る建築物の計画概要及び判定依頼予定日を記載した「構造計算適合性判定依頼事前通知書（別記様式 SF-01）」を電子メールの送信又はファクシミリを利用してする送信により、財団に通知するものとする。（は）

2 建築主事等は、原則として、前項の通知書に記載した判定依頼予定日を変更する場合は、速やかに財団に通知するものとする。

3 財団は、第 1 項の事前通知書の提出及び前項の通知を受けた場合に、次の各号に掲げる事項を建築主事等に通知する必要があると認めたときは、これを通知するものとする。

(1) 第 1 項の事前通知書の提出状況

(2) 第 9 条第 1 項の判定用提出図書等の受付状況

### （判定の求め）

第8条 判定を求めようとする建築主事等は、財団に対し、次の各号に掲げる図書等（以下「判定用提出図書等」という。）を提出するものとする。

(1) 構造計算適合性判定依頼書（別記様式 SF-02）

(2) 建築基準法施行規則（昭和 25 年建設省令第 40 号。以下「施行規則」という。）第 2 条第 2 項各号に規定する図書及び書類

(3) 判定の求めに係る建築物の構造計算が法第 20 条第二号イ又は同条第三号イに規定する国土交通大臣の認定を受けたプログラム（以下「大臣認定プログラム」という。）により適正に行われたものであるかどうかの判定を求める場合にあっては、施行規則第 1 条の 3 第 1 項第一号ロ(2)ただし書き（施行規則第 3 条の 3 第 1 項又は施行規則第 8 条の 2 第 1 項において準用する場合を含む。）に規定する磁気ディスク等（以下単に

「磁気ディスク等」という。）

- 2 判定用提出図書等の提出については、予め建築主事等と協議して定めるところにより、電子情報処理組織（財団の使用に係る電子計算機（入出力装置を含む。以下同じ。）と建築主事等の使用に係る入出力装置とを電気通信回線で接続した電子情報処理組織をいう。以下同じ。）の使用又は磁気ディスク等の提出によることができる。

#### （判定の受付及び契約）

第9条 財団は、前条の規定による判定用提出図書等の提出があったときは、次の各号に掲げる事項を確認し、これを受け付ける。

- (1) 判定の求めに係る建築物が、第6条に定める判定の業務の範囲に該当するものであること。
  - (2) 前条第1項各号に掲げる判定用提出図書等（判定に要するものに限る。）が提出されていること。
  - (3) 前条第1項(1)の構造計算適合性判定依頼書に記載すべき事項に記載漏れがなく、その記載内容が適切であること。
- 2 財団は、前項の規定による確認により、同項各号のいずれかに該当しないと認める場合においては、建築主事等にその補正を求めるものとし、当該補正後においては前項の規定を準用する。
  - 3 財団は、第1項の規定による受付をした場合においては、建築主事等に「構造計算適合性判定受付書（別記様式 SF-03）」を交付するものとする。この場合において、判定を求めた建築主事が置かれた都道府県、市町村若しくは特別区又は判定を求めた指定確認検査機関（以下「都道府県等」という。ただし、財団と予め別途契約を締結した者を除く。）と財団は別に定める「一般財団法人日本建築センター構造計算適合性判定業務約款（SR-02 東京）」に基づき契約を締結したものとする。なお、財団が前条第1項(1)の構造計算適合性判定依頼書に受付印を押印し、その写しを建築主事等に交付した場合は、財団の受付印が押印された構造計算適合性判定依頼書の写しをもって、構造計算適合性判定受付書に代えることができるものとする。（ほ）
  - 4 前項の構造計算適合性判定業務約款には、少なくとも次の各号に掲げる事項を記載するものとする。
    - (1) 建築主事等の協力義務に関する事項のうち、次に掲げるもの
      - (a) 建築主事等は、財団から判定用提出図書等について説明を求められたときは、速やかにこれに応じなければならないこと。
      - (b) 財団が判定に係る審査の実施にあたって必要があると認め、建築主事等に通知した上で、確認の申請者（建築物の設計者を含む。以下単に「申請者」という。）に対して構造計算に関する説明を直接求めたときは、建築主事等は、当該申請者がこれに応じるように、必要な措置を講じなければならないこと。
      - (c) 財団が判定に係る審査において、当該判定の求めに係る構造計算が適正に行われたものであるかどうかを判定することができない場合に、建築主事等に対してその旨及びその理由を通知したときは、建築主事等は、必要な措置を講じなければならないこと。

- (2) 判定手数料に関する事項のうち、次に掲げるもの
  - (a) 判定手数料の額の決定に関すること。
  - (b) 判定手数料の支払期日に関すること。
- (3) 判定の業務の期日に関する事項のうち、次に掲げるもの
  - (a) 構造計算適合性判定結果通知書（第 14 条第 1 項の通知書をいう。以下この項において「判定結果通知書」という。）を交付する期日（以下この項において「業務期日」という。）に関すること。
  - (b) 財団は、天災地変その他の不可抗力によって、業務期日までに判定結果通知書を交付することができない場合は、建築主事等に対してその理由を明示した上で、必要と認められる業務期日の延期を請求することができること。
- (4) 契約の解除及び損害賠償に関する事項のうち、次に掲げるもの
  - (a) 建築主事等は、判定結果通知書が交付されるまでの間に、財団に書面をもって通知することにより当該契約を解除できること。この場合において、財団は、既に支払われた判定手数料を返還せず、未だ支払われていない判定手数料の支払いを請求できるほか、生じた損害の賠償を請求することができること。
  - (b) 都道府県等は、財団がその責に帰すべき事由により業務期日までに判定結果通知書の交付をしないときその他の財団の責に帰すべき事由により当該契約を維持することが相当でないとき認められるときは、当該契約を解除することができること。この場合において、既に支払った判定手数料の返還を請求できるほか、生じた損害の賠償を請求することができること。
- (5) 財団が負う責任に関する事項のうち、次に掲げるもの
  - (a) 都道府県等は、判定結果通知書の交付を受けた後において判定の判断に誤りが発見されたときは、財団に対して、追完及び損害賠償を請求することができること。ただし、その誤りが、建築主事等が法第 18 条の 3 第 1 項に規定する確認審査等に関する指針（以下「指針告示」という。）に従って審査を行わなかったことその他財団の責に帰することができない事由に基づくものであることを財団が証明したときは、この限りでないこと。（は）
  - (b) (a)の請求の期限に関すること。

#### （判定の実施方法）

第10条 財団は、前条第 1 項の規定による受付をしたときは、速やかに、法第 77 条の 35 の 7 第 1 項に規定する構造計算適合性判定員（以下「判定員」という。）に判定を実施させることとする。

- 2 判定員は、原則として 2 人以上で判定に係る審査（以下単に「審査」という。）を行うこととする。ただし、「建築物の安全性の確保を図るための建築基準法等の一部を改正する法律等の円滑な運用について（技術的助言）」（平成 19 年 12 月 17 日付国住指第 3425 号。以下「技術的助言」という。）により、単純な構造形式である整形な建築物（許容応力度等計算を行った建築物）や比較的小規模な建築物（保有水平耐力計算を行った鉄骨造・鉄筋コンクリート造で高さ 20 m 以下の建築物）については、1 人の判定員により審査することができるものとし、これら以外の建築物についても、当該建築物の構

造上の特性により工学的に高度な判断を伴う構造計算のモデル化の方針、耐力壁の剛性及び耐力の評価、構造特性係数の設定等に関する審査以外の部分については1人の判定員により審査することができるものとする。また、「構造計算適合性判定員の業務について」（平成19年12月6日付19都市建企第602号。以下「通知」という。）により、延べ面積二千平米以下の建築物については、1人の判定員により審査することができるものとする。（い）

- 3 判定員は、指針告示第2に定める構造計算適合性判定に関する指針及び財団が作成した判定に関するマニュアルに従って、審査を行うこととする。（は）
- 4 財団は、審査の実施にあたって必要があると認めるときは、建築主事等に通知した上で、申請者に対して構造計算に関する説明を直接求めることとする。
- 5 判定員が、審査において、構造計算が適正に行われたものであるかどうかを判定することができないときは、財団は、建築主事等に対して、その旨及びその理由を「構造計算が適正に行われたものであるかどうかを判定することができない旨の通知書（別記様式SF-04）」により通知することとする。
- 6 前項の場合において、建築主事等が申請者に対して、指針告示第1第5項第3号イ若しくはロに規定する書面又は法第6条第13項、法第6条の2第9項若しくは法第18条第12項に規定する適合するかどうかを決定できない旨の通知書を交付することによって、第8条第1項(2)に規定する図書及び書類（この項及び次項において「申請書等」という。）の補正がなされ、又は申請書等の記載事項における不明確な点を説明するための追加説明書の提出がなされるとともに、建築主事等から財団に対して当該補正された申請書等又は追加説明書の送付があったときは、これらの図書及び書類を申請書等の一部として審査することとする。（は）
- 7 前2項の場合において、財団が第5項の通知書を交付した日から財団に前項の補正された申請書等又は追加説明書が到達した日までの日数は、第14条第1項の期間及び第15条第1項の延長する期間に含めないものとする。
- 8 判定員は、第5項に規定する場合を除き、審査の経過及び結果を記載し、かつ指針告示に従って判定を行ったことを証する書類として「判定チェックリスト（別記様式SF-05）」を、また、建築主事等が指摘した留意事項に対する回答その他判定における所見を記載した書類として「判定の所見等（別記様式SF-06）」を作成する。（は）
- 9 財団は、前項の判定チェックリスト及び判定の所見等に基づき、第14条第1項の通知書を交付する。
- 10 審査において行われる判定員の高度な専門知識等を必要としない構造計算書における数値の整合性の確認並びに申請者及び設計者への連絡等の作業については、技術的助言及び通知に基づき、審査を補助する職員（判定補助員）が行うことができるものとする。（い）

#### （国土交通大臣が定めた方法による場合の判定の審査方法）

第11条 法第20条第二号イの規定に基づき建築基準法施行令（昭和25年政令第338号。以下「令」という。）第81条第2項に規定する基準に従った構造計算で国土交通大臣が定めた方法によるものについての判定は、指針告示別表（い）欄に掲げる建築物の区分

に应じ、同表（ろ）欄に掲げる図書に基づき、同表（に）欄に掲げる判定すべき事項について審査することとする。（は）

#### （大臣認定プログラムによる場合の判定の審査方法）

第12条 法第20条第二号イ又は第三号イの規定に基づき令第81条第2項又は第3項に規定する基準に従った構造計算で大臣認定プログラムによるものについての判定は、前条及び次の各号に定めるところにより行うこととする。この場合において、磁気ディスク等の提出があったときは、別表（に）欄に掲げる判定すべき事項のうち、国土交通大臣によるプログラムの認定に当たり国土交通大臣が指定した図書以外の図書に係る判定すべき事項については、その審査を省略できるものとする。

- (1) 判定に係る建築物の構造の種別、規模その他の条件が大臣認定プログラムの使用条件に適合することを確かめること。
- (2) 判定に係る建築物の設計者が用いた大臣認定プログラムと同一のものを用いて、磁気ディスク等に記録された構造設計の条件に係る情報により構造計算を行い、当該構造計算の結果が提出を受けた構造計算書に記載された構造計算の結果と一致することを確かめること。
- (3) 提出を受けた構造計算書に大臣認定プログラムによる構造計算の過程について注意を喚起する表示がある場合にあっては、当該注意を喚起する表示に対する検証が適切に行われていることを確かめること。

2 前項(2)において、財団が行う構造計算は、財団が保有又はリース契約する大臣認定プログラムで行う。

#### （専門的な識見を有する者への意見聴取）

第13条 財団は、法第18条の2第3項の規定により読み替えて適用される法第6条第7項、法第6条の2第4項又は法第18条第6項の規定により、次のいずれかに該当する場合において必要があると認めるときは、構造計算に関して専門的な識見を有する者（以下「専門家委員」という。）の意見を聴くものとする。

- (1) 一般的に用いることが認められている基準とは異なる基準により構造計算が行われている場合
- (2) 極めて高度な知識が要求される場合
- (3) その他財団が判定を行うにあたって必要があると認める場合

2 財団は、専門家委員から意見を聴くときは、予め、意見聴取すべき事項及びこれに関する判定員の見解を申請者に示した上で、当該意見聴取すべき事項に関する見解を申請者に求めるものとする。この場合の手続きは、第10条第5項に定めるところによる。

3 専門家委員は、前項の判定員及び申請者の見解の妥当性について意見を述べるものとする。この場合、意見は原則として2名以上の専門家委員の合議に基づくものとする。

4 判定員は、専門家委員の意見を踏まえて、第10条第8項の判定チェックリスト及び判定の所見等を取りまとめる。

5 財団は、専門家委員から意見を聴いたときは、当該意見に関する記録を建築基準法に基づく指定資格検定機関等に関する省令（平成11年建設省令第13号。以下「機関省令」

という。)第31条の11第1項に規定する判定のための審査の結果を記載した図書として記録するものとする。

6 財団を指定した都道府県知事が当該都道府県知事が指定する者への意見聴取をその指定の基準等に定めた場合にあっては、第1項の意見聴取は当該都道府県知事が指定する者に対して行うものとする。

7 前項の規定による意見聴取の場合における第2項から第4項までの規定の適用については、これらの規定中「専門家委員」とあるのは「都道府県知事が指定する者」とする。

#### (構造計算適合性判定結果通知書の交付)

第14条 財団は、法第18条の2第3項の規定により読み替えて適用される法第6条第8項、法第6条の2第5項又は法第18条第7項の規定により、当該判定を求められた日から14日以内に、「構造計算適合性判定結果通知書(別記様式SF-07)」を建築主事等に交付するものとする。この場合において、判定を求められた日とは第9条第1項の規定により財団が受け付ける判定用提出図書等(第9条第2項の規定により財団が建築主事等にその補正を求めた場合は、当該補正後のもの)が財団に到達した日とする。

2 財団は、前条の規定により専門家委員の意見を聴いたときは、その旨及び聴取した意見を前項の構造計算適合性判定結果通知書に記載するものとする。

3 第1項の規定において、次の各号のいずれかに該当することにより構造計算が適正に行われたものであると判定しない旨の判定結果を通知するときは、同項の構造計算適合性判定結果通知書にその理由を記載するものとする。

(1) 諸数値の設定、モデル化、解析法・算定式等の適用、演算過程等が適正に行われていない場合

(2) 大臣認定プログラムによる構造計算の判定において、第12条第1項各号に規定する確認ができない場合

(3) その他構造計算が適正に行われていない場合

4 第1項の規定による交付は、次の各号に掲げる図書及び書類を添えて行う。

(1) 第8条第1項(1)の構造計算適合性判定依頼書の写し

(2) 第10条第8項の判定チェックリスト及び判定の所見等

5 第1項及び第4項に規定する図書の交付については、予め建築主事等と協議して定めるところにより、電子情報処理組織の使用又は磁気ディスク等の交付によることができる。

6 財団は、判定の結果及び方法について疑義があるとして建築主事等から説明を求められた場合は、これに適切に回答するものとする。

#### (判定期間の延長)

第15条 財団は、法第18条の2第3項の規定により読み替えて適用される法第6条第9項、法第6条の2第6項又は法第18条第8項の規定に基づき、法第20条第二号イの構造計算が同号イに規定する方法により適正に行われたものであるかどうかの判定を求められた場合その他国土交通省令で定める場合に限り、前条第1項の期間内に建築主事等

に同項の構造計算適合性判定結果通知書を交付することができない合理的な理由があるときは、35日の範囲内において、同項の期間を延長することができる。

- 2 前項の規定により前条第1項の期間を延長する場合は、その旨及びその延長する期間並びにその期間を延長する理由を記載した「構造計算適合性判定が期間内にできない旨の通知書（を前条第1項の期間内に建築主事等に交付するものとする。別記様式SF-08）」

#### （判定の求めの取り下げ）

第16条 建築主事等は、第14条第1項の通知書の交付前に確認の申請が取り下げられた場合においては、その旨を記載した「取下げ通知書（別記様式SF-09）」を財団に提出する。

- 2 前項の場合においては、財団は、判定の業務を中止し、判定用提出図書等を建築主事等に返却するものとする。

### 第3章 判定手数料等

#### （判定手数料の収納）

第17条 都道府県等は、別表2に定める判定手数料を銀行振込みにより納入するものとする。ただし、やむを得ない事由がある場合は別の収納方法によることができる。

- 2 前項の納入に要する費用は、都道府県等の負担とする。
- 3 都道府県等は、別途協議により、一括の納入等別の方法を取ることができるものとする。

#### （判定手数料の返還）

第18条 財団が収納した判定手数料は返還しない。ただし、財団の責に帰すべき事由により判定の業務が実施できなかった場合には、この限りでない。

### 第4章 判定員等

#### （判定員の選任）

第19条 財団は、判定の業務を実施させるため、法第77条の35の7第2項の規定により、機関省令第31条の6に規定する要件を備える者のうちから、判定の業務の適確な実施のために必要な数以上で、かつ2人以上の判定員を選任するものとする。

- 2 前項の規定により選任される判定員のうち2人以上は、常勤（専ら判定の業務を行う専任の職員で、かつ、判定の業務に週4日以上従事する者とする。以下同じ。）の職員とする。
- 3 財団は、第1項の規定により判定員を選任したときは、「指定構造計算適合性判定機関構造計算適合性判定員選任等届出書（機関省令別記第10号の4様式）」を都道府県知事に提出するものとする。
- 4 判定員は、財団の職員から選任するほか、財団の職員以外の者に委嘱して選任する

ことができるものとする。

#### (判定員の解任)

第20条 財団は、判定員が次の各号のいずれかに該当する場合には、その判定員を解任するものとする。

- (1) 法第 77 条の 35 の 7 第 4 項の規定による都道府県知事の解任命令があったとき。
- (2) 前号のほか、職務上の業務違反その他判定員としてふさわしくない行為があったとき。
- (3) 心身の故障のため、職務の執行に堪えないと認められるとき。
- (4) その他解任の必要があると認められるとき。

2 財団は、前項の規定により判定員を解任したときは、前条第 3 項の指定構造計算適合性判定機関構造計算適合性判定員選任等届出書を都道府県知事に提出するものとする。

#### (判定員の配置)

第21条 判定の業務を実施するため、財団の職員の判定員を本部に 7 人（判定の業務に週 5 日従事する者に換算して 7 人）以上、大阪事務所に 2 人（判定の業務に週 5 日従事する者に換算して 1.5 人）以上配置するほか、財団の職員以外の判定員を 200 人（判定の業務に週 5 日従事する者に換算して 15 人）以上選任する。（ほ）

2 財団は、判定の求めの件数が一時的に増加すること等の事情により、判定の業務を適確に実施することが困難となった場合にあっては、速やかに、新たな判定員を選任する等の適切な措置を講じるものとする。

#### (専門家委員の選任)

第22条 財団は、第 13 条第 1 項の規定により意見を聴くため、次の各号のいずれかに該当する者のうちから、専門家委員を選任するものとする。

- (1) 学校教育法（昭和 22 年法律第 26 号）に基づく大学又はこれに相当する外国の学校において建築物の構造に関する科目を担当する教授若しくは准教授の職にあり、又はあった者
- (2) 建築物の構造に関する分野の試験研究機関において試験研究の業務に従事し、又は従事した経験を有する者で、かつ、当該分野について高度の専門的知識を有する者
- (3) 法第 77 条の 42 第 1 項の認定員若しくは法第 77 条の 56 第 2 項において準用する法第 77 条の 42 第 1 項の評価員であり、又はあった者
- (4) 地方公共団体が設置する耐震診断等判定委員会その他これに類する委員会の委員であり、又はあった者など、理事長が建築物の構造に関して特に優れた専門的知識及び技術を有する者として認める者

2 財団を指定した都道府県知事が、専門家委員を選任した旨の書類及び当該専門家委員が構造計算に関して専門的な識見を有することを証する書類の提出をその指定の基準等に定めた場合にあっては、当該都道府県知事に対して、当該都道府県知事が定める方法により、提出するものとする。

- 3 専門家委員は、財団の職員から選任するほか、財団の職員以外の者に委嘱して選任することができるものとする。

#### (専門家委員の解任)

第23条 財団は、専門家委員が次のいずれかに該当する場合には、その専門家委員を解任するものとする。

- (1) 職務上の業務違反その他専門家委員としてふさわしくない行為があったとき。
  - (2) 心身の故障のため、職務の執行に堪えないと認められるとき。
  - (3) その他解任の必要があると認められるとき。
- 2 財団を指定した都道府県知事が、専門家委員を解任した旨の書類の提出をその指定の基準等に定めた場合にあつては、当該都道府県知事に対して、当該都道府県知事が定める方法により、提出するものとする。

#### (秘密保持義務)

第24条 財団の役員及びその職員（判定員、専門家委員及び第26条第1項の監視委員会の委員を含む。次条第3項において同じ。）並びにこれらの者であった者は、判定の業務に関して知り得た秘密及び個人情報を漏らし、又は盗用してはならない。

#### (判定の業務の実施体制)

第25条 判定の業務は、他の業務（建築物の確認検査等に関する業務を除く。）と独立した部署で行い、担当役員を配置する。

- 2 判定の業務に従事する職員を、財団の職員の判定員を含め、本部に14人以上、大阪事務所に4人以上配置する。（ほ）
- 3 財団の役員及び判定の業務に従事する職員は、その職務の執行に当たって厳正かつ公正を旨とし、不正の行為のないようにしなければならない。
- 4 判定員は、次に掲げる者が建築主である建築物、設計、工事監理、施工その他の制限業種に係る業務を行う建築物又は建築確認を行う建築物について、判定の業務に従事してはならないこととする。
  - (1) 当該判定員
  - (2) 当該判定員の親族
  - (3) 当該判定員の関係企業等
- 5 財団は、財団で実施する大臣認定プログラムを使用した判定のすべてに対応できる大臣認定プログラムを使用できる環境を整備することとする。（い）

### 第5章 判定の業務の公正かつ適確な実施を確保するための措置

#### (監視委員会による監査等)

第26条 財団は、次の各号に掲げる者で委員を構成する監視委員会を設置するものとする。

- (1) 弁護士会の推薦する者
- (2) 消費者団体の推薦する者

- (3) 建築物の構造に関する学識者
  - (4) 財団の監事
- 2 監視委員会は、次の各号に掲げる業務を行うものとする。
- (1) 規程の審議
  - (2) 財団から提出された理事会の議事録の確認
  - (3) 財団が行った判定の業務に関する技術的検査を行わせる第三者の指名
  - (4) 前号の規定による指名を受けた者が行った技術的検査の結果の確認
  - (5) 係争事件に係る監査
  - (6) その他判定の業務の公正かつ適確な実施のために必要な監査等
- 3 監視委員会は、四半期ごとに前項各号に掲げる業務を行い、当該業務の終了後 30 日以内に財団を指定した都道府県知事に報告しなければならないものとする。

#### (技術的検査)

第27条 前条第2項(3)の規定により監視委員会が指名した者は、財団が行った判定の業務に関する技術的検査を行い、その結果を財団に報告するものとする。

#### (改善の措置)

- 第28条 財団は、第26条第3項の規定による報告において改善の指摘を受けたときは、次の各号に掲げる措置のうち当該指摘事項の改善のために必要なものを講じるものとする。
- (1) 規程の見直し
  - (2) 第10条第3項のマニュアルの見直し
  - (3) 第20条第1項の解任
  - (4) 第21条第2項の措置
  - (5) その他判定の業務の公正かつ適確な実施を確保するために職員、設備、判定の業務の実施の方法その他の事項に関して必要な措置
- 2 財団は、前項の措置に関する計画を作成したときは、速やかに都道府県知事に報告するものとする。

#### (定期報告)

第29条 財団は、法第77条の35の12第1項の規定に定める報告のほか、財団を指定した都道府県知事が判定の業務に関する定期報告の実施をその指定の基準等に定めた場合にあっては、当該都道府県知事に対して、当該都道府県知事が定める方法により、報告しなければならないものとする。

## 第6章 雑 則

#### (帳簿及び図書等の保存期間)

第30条 帳簿及び図書等の保存期間は、次の各号に掲げる帳簿及び図書等の区分に応じ、それぞれ当該各号に定めるとおりとする。

- (1) 法第 77 条の 35 の 10 第 1 項に規定する帳簿 機関省令第 31 条の 14 の規定による引継ぎを完了するまで
- (2) 第 8 条第 1 項(1)の構造計算適合性判定依頼書、同条同項(2)の図書及び書類、第 9 条第 3 項の構造計算適合性判定受付書の写し（第 8 条第 1 項(1)の構造計算適合性判定依頼書に受付印を押印したものの写しをもってこれに代えた場合は除く。）、第 10 条第 5 項の構造計算が適正に行われたものであるかどうかを判定することができない旨の通知書の写し、同条第 6 項の建築主事等から送付のあった補正された申請書等及び追加説明書、同条第 8 項の判定チェックリスト及び判定の所見等の写し、第 13 条第 5 項の記録、第 14 条第 1 項の構造計算適合性判定結果通知書の写し並びに第 15 条第 2 項の構造計算適合性判定が期間内にできない旨の通知書の写し 第 14 条第 1 項の構造計算適合性判定結果通知書の交付を行った日から 15 年間
- (3) 第 8 条第 1 項(3)の磁気ディスク等 第 14 条第 1 項の構造計算適合性判定結果通知書の交付を行った日から 15 年間

#### (帳簿及び図書等の保存及び管理の方法)

第31条 前条各号に掲げる帳簿及び図書等の保存は、審査中にあつては審査のため特に必要がある場合を除き事務所内において、審査終了後は施錠できる室、ロッカー等において、確実であり、かつ、秘密の漏れることのない方法で行う。

2 前項の保存は、前条(1)に規定する帳簿への記載事項及び同条(2)に規定する図書が、電子計算機に備えられたファイル又は磁気ディスク等に記録され、必要に応じ電子計算機その他の機器を用いて明確に紙面に表示されるときは、当該ファイル又は磁気ディスク等を保存する方法によってすることができる。

3 前項の規定に基づき帳簿、図書を電子計算機に備えられたファイル又は磁気ディスク等に保存した場合において、当該保存したデータを印刷した書類がある場合には、当該ファイル又は磁気ディスク等のデータを原本として扱うものとする。

#### (経理的な基礎の確保)

第32条 財団は、法第 77 条の 35 の 4 第二号に規定する経理的な基礎を確保するために、所要の額以上の積立金を特定資産として設けるものとする。

2 財団が判定の業務を実施するに当たり第三者に損害を加えた場合において、その損害の賠償に関し財団が負うべき民事上の責任の履行に必要な金額を担保するために、次のいずれにも該当する保険契約を締結した場合にあつては、その契約の内容を証する書類に記載された保険金額を、前項の経理的な基礎の要件のうち財産の評価額として必要な額に充当するものとする。

(1) 財団が判定を行った建築物の瑕疵が風水害、地震その他の天災によって明らかとなった場合における当該瑕疵についての補償が免責事項となっていないもの

(2) 構造計算書その他財団が判定の業務を実施するために必要な資料として財団に判定を求めた者から提出されたものに記載された事項に虚偽又は誤謬があった場合における当該建築物の瑕疵についての補償が免責事項となっていないもの

**(電子情報処理組織に係る情報の保護)**

第33条 財団は、電子情報処理組織による判定の求めの受付及び図書の交付を行う場合においては、情報の保護に係る措置について別に定めることとする。

**(判定の業務の休廃止の許可の申請)**

第34条 財団は、法第77条の35の13第1項の規定により判定の業務の全部又は一部を休止し、又は廃止しようとするときは、指定構造計算適合性判定機関業務休廃止許可申請書（機関省令別記第10号の7様式）を都道府県知事に提出するものとする。

**(判定の業務の引継ぎ)**

第35条 財団は、法第77条の35の15第3項に規定する場合には、次の各号に掲げる事項を行うものとする。

- (1) 判定の業務を都道府県知事に引き継ぐこと。
- (2) 第30条(1)に規定する帳簿並びに同条(2)及び(3)に規定する図書等を都道府県知事に引き継ぐこと。
- (3) その他都道府県知事が必要と認める事項

2 前項の規定の実施に要する費用は、財団の負担とする。

**(附則)**

この規程は、平成19年6月20日から施行する。ただし、平成21年5月14日までの間は、第2条(3)(b)及び同号(c)の適用については、第2条(3)(b)中「その者が所属する企業、団体等（過去2年間に所属していた企業、団体等を含む。）」とあるのは、「その者が所属する企業、団体等」と、同号(c)中「その者の親族が役員である企業、団体等（過去2年間に役員であった企業、団体等を含む。）」とあるのは「その者の親族が役員である企業、団体等」と、それぞれ読み替えるものとする。

**(附則)**

この規程は、平成20年 4月 1日から施行する。(い)

**(附則)**

この規程は、平成21年 6月 1日から施行する。(ろ)

**(附則)**

この規程は、平成22年 6月 1日から施行する。(は)

**(附則)**

この規程は、平成22年 8月 9日から施行する。(に)

**(附則)**

この規程は、平成23年 4月 1日から施行する。(ほ)

**(附則)**

この規程は、平成23年11月 7日から施行する。(へ)